

その告白は勘違いです

雨宮里玖

amemiya riku

illustration

かどをとる



1 告白したつもりはない

俺は今、人生最大の危機を迎えている。

「さ、三点……」

教室の一番後ろのさらに端っこの席に座る俺の手には、バツだらけの数字の答案がある。

七沢莉紬^{ななざわりつ}って名前の横に、でかでかと三点の記載。

高一、高二と成績はとんでもなく悪かったが、高校三年生、一学期の中間テストはマジで終わった。

「おい、莉紬。百点満点で三点とかお前やばくね？」

ニヤニヤしながら俺の答案を覗き込んでくるのは、隣の席に座る友達の今村裕^{いまむらゆう}太だ。

「見んなよ」

「見えちゃったんだよ。さすがの俺も一桁ひじけたはない」

「俺だってここまでひどいのはねえよ」

会話の途中、教壇に立っている数学教師が「その二人、静かにしろ！」と睨みつけてきた。

直後、俺たちは黙る。テストの点数が低いのに、これ以上授業点を引かれたら俺はやばい。

だってできないのは数学だけじゃない。主要五教科は壊滅的だし、他の科目も目も当てられない。人並みって言えるのは体育だけだ。

成績が悪い。素行もよくない。高三に進級するときに校長から直々に警告を受けている身だ。

だから頑張らなきゃいけないのに、さらに成績が下がった。これで期末まで爆死したらマジで卒業できない。

「今回のテストで満点を取ったのは学年で一人だけだ。有馬ありま、よくやったな！」
教師が教室の中央あたりに座っている有馬に向かって拍手をする。それに合わ

せてクラスみんなも「有馬すげえ」「また有馬くん百点」と賞賛の拍手を送った。
有馬は「得意分野だったんだ」などと謙遜けんそんしているけど、まんざらでもない顔をしている。

何が得意分野だよ。

あいつの成績はいつも学年一位か二位だ。得意分野だから百点なら、全教科全範囲が得意分野ってことかよ。

「中間が悪かった奴は期末で挽回しろよ」

んなこと言われなくてもわかってる。それを偉そうに黒板を叩きながらのたまう教師。

いや、そういうの要らねえから、どうしたら楽に成績が上がるかを教えてくれよ。

「はあ……」

溜め息をつく。

これはなんとかしなきゃいけない。高校は辞めたくない。あと一年頑張れば卒業できるところまで粘っているのに。

昼休みになってすぐ、裕太が俺のそばにやってくる。こいつは三年間クラスが同じだから、俺の危機的状況をよく理解している。

「おい、莉紬。お前三年になったら勉強頑張るって言ってただろ？　これ、やばいって」

「うう……俺だってそう思ってるよっ」

泣き言が口をつく。めっちゃ頑張って勉強した結果がこれだ。

「俺、莉紬と一緒に卒業したいよお」

「俺だってそうだよ」

思わず、「あー！」と頭を抱えた。

二百八十八人中二百八十八位の俺の成績は、どうやったらまともになるんだ！
「周りの奴らの頭がよすぎるんだよ……」

俺は高校受験のときに、無謀にもこの進学校に挑んだ。そして、模試ではずっとE判定だったのに、なぜか見事に補欠合格を勝ち取ったのだ。

けれど、喜び勇んで入学してから思い知る。

周りの奴らの出来がよすぎてまったくついていけない。あつという間に落ちこ

ぼれ、俺より成績の悪い奴は高三に上がる前にみんな退学した。

つまり、今この学校でもっとも卒業が遠い男は、俺だ。

「裕太あ、なんとかしてくれよ」

両肩を掴んで揺らすと、裕太は「あばばば」とアホな声を出す。

「くっそー！」

どうしようかと考えを巡らせているとき、ふと視界に入ってきたのは、さっきのテストで百点を取った有馬だ。

高三になって初めて同じクラスになった優秀なあいつは、この学校の有名人だ。その逸話だけは高一のころから俺の耳にも入ってきていた。

「有馬くん、この問題の解き方教えて」

二人組の女子生徒がいそいそと声をかける。有馬が「いいよ」と答えると女子ははいいだ声を上げた。

ほんとムカつくな。

メガネ野郎の有馬は成績もいいが運動もできる。さらにはこのクラスの学級委員長で、背が高くて顔がいい。

対して俺は、バカだしふざけてばかり。背もまだ百七十ちよつとだ。髪型や見た目には気を遣っているつもりだけど女子には「弟みたい」「可愛い」と言われる始末。

男らしくなりたいたのに、去年は五ミリしか身長が伸びなかった。このまま止まっていたまると、牛乳を飲んでなるべく早く寝るようにしている。

みんなはなんでもできる有馬のことを『出木杉くん』と呼んでいる。けど、俺はそうは思わない。優等生ぶった大人しいキノコみたいな髪型にクソダサイメガネ。どちらかといえば『のび太』だろ、有馬は。

「有馬ばかりモテてつまんねえよな」

隣にいた裕太の呟きに、俺も激しく同意して大きく頷く。

さすが裕太、気が合うな。俺もあいつのことをクソ野郎って思ってるよ。

「でもさ、有馬って勉強、教えるのうまいらしいぜ。有馬に聞くとすげえわかりやすいんだってさ」

「はあー、へー、ほーん。それで？」

聞く気がない俺は適当な相槌^{あいつ}を打つ。

あいつを褒める言葉なんて聞きたくもないわ。

「有馬にさ、頼んでみたら？」

「は？ 何をっ？」

「勉強教えてって」

「あいつにいつ？」

思ってもみなかったことを言われて、変な声が出た。

秀才・有馬に勉強を教われれば、テストの点数は確実に上がるだろう。

あいつは頭がいいのはもちろん、この学校のテスト攻略の達人だ。各教科の先生の思考パターンをよく知っていて、テストに出る問題をよく当てているらしい。

傾向と対策がバッチリじゃなきゃ、毎回学年一位や二位なんて取れないよな。

「いや、莉紬の気持ちもわかるよ、あいつに頭下げるなんて腹立つけどさ……」

「裕太！ お前、天才か！」

「……え？」

「それだよ、なんとかしてあいつにすり寄って勉強を教えてもらおう！ 俺が無事に卒業するためには有馬の力が必要だ！」

グツと拳^{こぶし}を握りしめてウンウン頷く俺を、裕太は呆れ顔で見ている。

「莉紬はプライドねえのかよ」

「あるよ。どんな手を使っても卒業してやるっていうプライドがな！」

俺は有馬の背中をヒットマンのように鋭く睨みつける。

すぐ近くにいい奴がいたじゃないか。

待つてろよ、有馬。俺はなんとしてもお前を利用して成績を上げてやる。

俺は早速、有馬に話しかけようと試みた。

でもそれが、すっげえハードルが高い。

同じ学年とはいえ、この二年間、俺はほとんどあいつと話したことがない。クラスが違ったっていうのもあるが、あいつとはそもそも生きている世界が違うんだ。

俺は学校をサポートとかアホなことばかりやらかしている不真面目なグループに所属しているんだけど、有馬は違う。成績優秀、部活では部長をやっちゃうような人気者ばかりのキラッキラの一軍グループにいる。

そんな奴らに話しかけられるのは、同じくキラキラした陽キャくらいものだ。

落ちこぼれグループにいる俺は、あいつらの輝かしい青春を教室の隅から見ているだけ。接点はゼロ。同じ教室にいるのに、光と陰、主演とモブくらい違う。

「なんとか話しかけなきゃなあ」

教室の隅から有馬を眺める。あいつの周りにはいつも一軍グループたちがいて、とてもじゃないが声をかけられる雰囲気じゃない。

「とりあえず、近づいてみようぜ」

裕太に言われて、有馬のいるグループに近づいていく。

あいつの近くまで来たとき、裕太が俺を肘^{ひじ}でつついた。

ほら何かしろの合図なんだろうけど、有馬はテニス部の部長といい匂いのする可愛い女子と三人で和やかに話をしている。そんな中に割り込んでいけるわけがない。

こんな状況で有馬に話しかけるとか、マジで無理ゲーすぎる！

俺は「無理だ」と泣き顔で首を横に振って裕太に訴えた。裕太は呆れ顔だ。

「おうわっ！」

突然、裕太が体当たりをかましてきた。俺はよろけて有馬の背中にぶつかる。

有馬はふらつき、机に手をついた。そして、ゆっくりと振り返る。
「ご、ごめんっ!」

俺は深々と頭を下げて、さっさとその場から逃げ出す。
有馬の顔なんて恐ろしくて見られなかった。

もし冷たい目で俺を見下していたら、蔑^{あざむ}んだ目で見られたら。
無理無理、耐えられない。

そんな顔を見たら、マジで心が折れるよ。

教室を出て廊下まで逃げ、やっと胸を撫^なで下ろす。

一息ついた俺のもとに、裕太がニヤつきながら近づいてきた。

「おい、裕太っ、あれはないだろっ!」

俺は思いっきり睨みつけてやる。

「だっってお前、話しかけないで通りすぎようとしたからさ。きっかけ作んなきゃって思っ」

「あんなの無理だろ! あー! 有馬に変な奴^{やつ}って思われたよ、絶対」
どうしたらいい。有馬に話しかけることすらできないなんて!

「そうだよなあ……有馬の周りにはいつも誰かいるから話しかけらんねえな」

「それ、わかってんなら俺を突き飛ばすなよ」

「あはは、ごめんごめん」

謝り方軽いな! まあ、裕太とはいってもこんな感じだけどさ。

「でもさ、話しかけないと勉強教えてもらうどころじゃないんだよ」

俺は頭を抱える。こんな初歩の初歩で足踏みしている場合じゃない。そんなことはわかってるのに。

「安心しろ、次の方法がある!」

裕太は俺のポケットからスマホをサッと奪い取り、俺に握らせようとする。

「DMで有馬を呼び出した」

「マジかよ」

それを受け取りながら、俺は溜め息をつく。

最初から前途多難だ。話しかけようと試みたことでわかった。同じクラスにいるのに有馬はこんなに遠い存在だったんだ。

それから二日後。

「……あいつ、俺を無視しやがったな」

昼休みにスマホを見て舌打ちする。

クラス内SNSグループから有馬の連絡先を見つけてメッセージを送ったのに、既読がついたきり、まったく返信がない。

別に変なメッセージは送ってない。ただ『昼休みにちよつと話せない?』と聞いただけだ。

「有馬の野郎、俺の決死のDMをなんだとと思ってんだよ!」

もちろん、有馬とやり取りなんてしたことがない。

どうしようどうしようと思込んで悩んで、やつとの思いでドキドキしながらメッセージを送った俺の労力を返せよ。

何? 下々の生徒とは話す気ないってやつ?

前々から鼻につくと思っていたけど、マジでムカつくな。

「返信ないの?」

「ないよ。俺、有馬に完全に無視されてる。俺の存在、あいつの中でないことに

なってるらしい」

俺は有馬の背中に向かつて心の中で中指を立てる。

俺だってクラスの一員だ。メッセージを読んだら少しは反応しろよ。

「もうダメだ。有馬のことは諦めよう」

声はかけられない。メッセージも既読無視じゃ、手の打ちようがない。有馬は俺にとって高嶺^{たかね}の花なんだ。

「莉紬、こうなったら最後の手段だ」

裕太が自信ありげに言う。

「最後の手段……? まだなんかあのかよ」

「もちろん。元気出せよ、莉紬。俺が有馬と二人きりで話せるようにしてやる」

裕太は落ち込んでいる俺の肩を優しく叩いた。

「マジで?」

「ああ。俺に任せろって。お前は放課後に第二校舎の裏で待つてればいい。そこにあいつを呼び出してやるから」

「すげえ助かるけどさ、どうやってあいつをおびき出すんだよ」

そんなこと言われても、にわかに信じがたい。裕太は自信满满だけど、こいつだってまともに話したことなんてないはずだ。どうする気なんだろう？

「何、お前。俺にそんなことできんみたいな顔すんなよ。大丈夫、大丈夫、大丈夫だって！ 莉紬はどうやって有馬を口説き落とすか考えてろよ。呼び出したって断られたら意味ねえだろ」

「たしかに」

裕太の言うとおりだ。てか、呼び出すよりもそっちのほうがハードル高いな。友達でもないのに、どうやってたら有馬がそんな面倒なことを引き受けてくれる？ 声をかけることばっか考えてて、そっちを考えていなかった。

「莉紬、なんか考えとけ。有馬の呼び出しは俺がやるから」

「あ、ああ……ありがと……」

「これくらい気にすんなって。莉紬、俺と一緒に卒業しようぜ！」

そんなことを笑顔で言ってくれる裕太はめちゃくちゃ頼りがいがある。

でも、俺は内心めっちゃ焦っている。

俺には何もない。それでどうやってあの有馬を口説き落とすんだ……？

帰りのショートホームルームが終わったあと、俺は裕太に言われたとおりに第二校舎の裏で待つ。

第二校舎の裏は植え込みの木々と備蓄倉庫しかない、ほとんど人が通らない場所だ。ちょっとした内緒話をするにはもってこい。

俺と裕太は時々授業をサボって、ここで学食の自販機で買った菓子パンを食っている。

「はあ……マジ緊張する……」

一応作戦は考えた。

でも、それで有馬が勉強を教えてくれるかどうかはわからない。

こんなんだつたらもつと前から有馬と仲良くなっておくべきだったな。今さら後悔してもしきれない。

落ち着かず同じ場所を行ったり来たりしている俺の背後から、「おい」と誰かが声をかけてきた。

振り返ると、有馬が立っている。

見慣れたグレーのブレザーにダークグレーのスラックス。五月でも暑いから、ブレザーなしの白シャツ一枚の俺と違って、シャツの一番上のボタンまできっちり留めている。

規則どおりで窮屈そうなのに、涼しい顔をして。

「あ、有馬！ 忙しいのにごめんな！」

「俺を呼んだのって、お前……？」

有馬は俺を見てなぜか目を瞬かせた。

こいつ、誰に呼び出されたのか知らなかったのか……？

そういえば裕太はどうやって有馬をここに呼んだんだろう。

「あー、うん。俺。……やだった？」

「別にいいけど。ちよつと意外だった」

意外ってなんだよ。俺が話しかけるなんて思わなかったってことか？

「あのさ、ちよつと前にメッセージ送ったんだけど、気づいてた……？」

「気づいてた。でも何かの間違いだと思った」

「そ、そうだったんだ……」

間違いだと思っても『誰かと間違えてない？』とか反応よこせよ、とツツコミを入れたくなるのを必死でこらえた。

俺は正面から有馬と対峙する。

なんか、初めてまともにこいつを見た気がする。

くつきりとした目鼻にシャープな輪郭。肌が綺麗で透明感があるから、作り物

じみたクールな印象を受ける。

有馬って目が綺麗なんだよな。近くで見ると、キリリとした形のよさがよくわかる。

残念なのは、真つ黒ながつつり前髪とメガネだ。それがいかにも優等生って感じの雰囲気醸し出している。

そして、メガネの奥の目は決して笑っていない。

有馬はさつきから俺を「何こいつ」みたいな目で見ていた。

その冷たい視線がグサリとくるが俺は負けない。負けてたまるか！

「えーっと、同じクラスなのはわかるんだけど……名前、なんだっけ？」

「俺の名前も知らないのっ？」

「ごめん。わからない」

はつきり言うなよ。

うわあ、普通にシヨックだ。

でも同学年の生徒は二百八十八人もいる。その中のほとんどの人とは話もしたことないし、有馬とは高三になって初めて同じクラスになった。有名人の有馬は誰もが知っているけど、俺はそうじゃない。

だから、怒っちゃいけない、冷静に、冷静に……

「七沢だよ、七沢莉紬！」

フルネームを教えてやると、「ななさわりつ……」と有馬はボソツと呟いた。まるで幼い子どもが初めて知ったものを確認するみたいに。

「七沢莉紬。いい名前だな」

「あ、そう？　ありがとう」

急に褒められて、こそばゆくなる。

それにしても、いい声してんな。名前を呼ばれて、ちよつとドキツとした。

今はそんなこと全然関係ないけど。なんか好き。こいつの声。

「なあ。あの手紙に書いてあったことつて、本気？」

「手紙……？」

やつべえ、有馬がなんのこと言ってるのか俺にはわからない。裕太は有馬に手紙を送ってここに呼び出したのか。

そのあたりを、もつと真面目に聞いときゃよかったなあ。

「それとも俺をからかった？」

「からかってなんかないよ！　そんなことするわけないって、俺の気持ちは本気に決まってるだろ」

ここで、からかったんだよ、なんて頷いたら話が終わる。

俺はよくわかんないまま適当に話を合わせた。

「で、何？　俺とどうなりたいの？」

有馬が抑揚のない声で言う。

こいつ、さつきから俺を懐疑的な目で見てんな。

しかも「どうなりたい」って言い方、なんなんだよ。

裕太はどんな手紙を書いたんだろう？ まあ、名前も知らないクラスメイトくらいいきなり手紙で呼び出されたら、誰だって身構えるよな。

「あ、あのさ、有馬に頼みたいことがあって……お前って成績いいだろ？ それで、ちょっとだけ勉強のコツを教えてくれないかなって……」

早速、俺は本題に入った。

まごまごしている場合ではない。なんとかして有馬からいい返事を貰わなくちゃ。

「勉強？ 七沢は俺と友達になりたいの？」

「友達っていうか、なんつーか……。今からでも本気で頑張りたいっていうか」別に友達になってくれなくてもいい。ただ勉強を教えてもらえないかなってだけで。

でも、ここで「友達になりたいわけじゃない」って言うのは、絶対によくない気がする。

「友達じゃダメなんだ」

「ダ、ダ、ダメってわけじゃない！ そうだよな、俺たちはお互いのことを知ら



ないから、まずは友達になるってのもいいよな！」

俺は必死で弁明する。

たしかに、友達でもない奴に勉強教えるのは嫌だよな。すべては友達になつてから！ うん。それがいい。

「それでな、それでなっ！ 有馬は教え方がうまいって聞いて俺に勉強教えてくれないかなって。俺さ、成績がギリギリで、なんとかしなきゃいけないって……」

「なんで俺がそんなことしなきゃいけないの？」

有馬の冷たい視線が俺のミジンコみたいな心に突き刺さる。

こいつ、親切心つてのがないのかっ？ 俺が名前も知らないレベルでも、仮にもクラスメイトがこんなに丁寧に頼んでるんだから聞けよ！

「有馬は委員長なんだからさ、クラスメイトが困ってたら、そこは助けるところだろ？ ほら、クラスの評判が下がると、委員長のお前のせいになる。有馬のクラスは学年一のいいクラスだって言われたいだろっ？」

両手を顔の前で擦り合わせて懇願する。

有馬が学級委員長であることを利用して助けてもらおうという、小狡い作戦だ。

頼む、頼むよ有馬！ 可哀想な俺を助けてくれ！

「興味ない」

ばっさり！ 俺が考えてきた最高の口説き文句をばっさり！

無言のまま有馬はじつと俺の目を窺うように見つめる。

「な、何……？」

俺は思わず一歩後ずさるが、その間合いをすぐに詰めてきた。

有馬の顔がすぐ近くにある。その目は俺だけを見つめていた。

こいつの目つてすごく綺麗だ。まつ毛が長く二重でくつきりしているのもあるけど、なんか、こう、吸い込まれそう……

人相には性格が表れるって言うけど、有馬の視線からはあったかい包み込むような優しさを感じた。

なんでだろう。もっとクールな男だと思っているのに、メガネの奥の目は違う。有馬って本当は冷たい男じゃないのかな。

「本気で？」

急に有馬の目つきが鋭くなった。

「は……？」

「お前、本当に勉強やる気あるのかって聞いている」

「うん、あるよ、もちろん」

「本当に？ その言葉、信じていいの？」

有馬は俺から視線を外さない。俺がどう答えるかを待っている。

やばい。この状況をなんとかしなきゃ。

なんて答えればいい？ なんて言えば、有馬は俺に勉強を覚えてくれるようになる……？

ここで判断を間違えたら終わりだ。どうしたら俺の本気を有馬に伝えられる……？

「なんでもする」

俺は有馬を強い視線で見つめ返す。

「お前が勉強を覚えてくれるなら、お前の望むこと、なんでもしてやるよ」

これは嘘じゃない。

卒業するためなんでもやってやる。

俺には有馬に返せるものなんてない。この身一つしかないんだ。ちっぽけなブライドなんてかなぐり捨ててやる。こいつの召使いになった方がいい。なんだってやってやるから、卒業させてくれ！

「なんでもって、お前さ……」

「わかってるよ、バカだって言いたいんだろ？ でも、どうしようもないんだって！ 中間のぶんを期末で取り戻さないと、俺は一学期でこの学校から消える。だからお前を頼るしかないの！」

俺は必死で訴える。

有馬だけが頼りだ。俺を救ってくれよ、この可哀想な俺を！

「……わかった。そこまで言うなら教えてやるよ」

有馬が頷いた。

有馬がオッケーしてくれた！

「ありがとう、有馬！」

嬉しさのあまりに小躍りする。

軽くステップしてから、「やべえこんなんでも踊ってたら変な奴って思われる」

と即座に気づいてやめたけど。

せめて笑ってくれよ、有馬。そんな冷ややかな視線で見られると、こっちが恥ずかしいわ！

「と、とにかく！ これからよろしくな、有馬！」

気を取り直して有馬に手を伸ばす。もちろん、友好の握手だ。

俺のその手を、有馬は見て見ぬふりをした。俺の厚意を無表情で拒否したのだ。「じゃあ、明日からやろう」

返事はそれだけ。

俺の手は宙ぶらりんのまま。有馬は背中を向けてさっさといなくなってしまう。

その態度に、俺はボカんだ。

「何あれ……」

行き場を失った手を力なく下ろす。

有馬って、もしかして極度の恥ずかしがり屋なのか……？

そういえばあいつが誰かにベタベタしているところを見たことがない。俺と裕

太みたいに肩組んだり触れ合ったりしていた覚えがまったくなかった。

俺、この先、大丈夫かな。

有馬とうまくやっていけるか、ものすごく自信ない！

有馬と話をしたあと。

俺は教室で待っていた裕太と合流した。

帰り道で、「どうだった？」と不安げに聞かれ、かいつまんで話してやる。

「莉紬、それ、有馬に嫌われてるんじゃない……！」

「は……えっ？」

「だって、こっちが握手しようとしているのに、それを拒否るって相当じゃね？」

「拒否ったっていうか、無視したっていうか……」

「それどっちもアウトだろ」

マジかよ。俺、有馬に嫌われてたの？ 恥ずかしくて人と握手できないのかと思ってたわ！

「ウソだろ、そしたら俺、なんで有馬から勉強教えてもらえんの？」

わからない。有馬の考えていることが俺にはまったくわからない。

「たしかになー。嫌いなら勉強教えようなんて思わないもんなあ……」

裕太が首をかしげる。

有馬はどういうつもりなんだろう？

でも、たしかに俺は有馬に勉強を教えてもらう約束をした。明日からやろうって有馬が言っていた。

「やっぱ委員長だからかな？」

あいつは委員長を立派に務めて称賛されることには興味がないと言っていたが、だとしたらなんで引き受けてくれたんだろう。

俺、あいつのこと、何も知らないな。有馬って本当はどういう奴なんだろう。

「そうだ裕太、お前どうやって有馬を校舎の裏に呼び出したんだよ」

隣を歩く裕太に顔をずいっと近づけて、問い詰める。

ずっと気になっていたんだ。俺と話しているときの有馬の様子がちょっとおかしかったから。

「有馬、手紙がなんとかって言ってた」

「あ、あはは。それな……怒るなよ？」

「なんだよ」

俺は眉根を寄せる。

なんか裕太の様子がおかしい。これは絶対に何かある。

「俺、有馬に手紙を書いて渡したんだ。もちろん俺が書いたとは言わなかった。

ある人から手紙を渡してくれて頼まれたって言った」

「それで？　どんな手紙？」

「男が貰ったら、絶対に嬉しい感じの内容だよ。あれなら手紙を書いた相手に会いたってなると思ったんだ」

「……は？」

それだけじゃわからない。でも、なんか胸がザワザワする。すごい嫌な予感がする。

「ずっと前から有馬くんのこと気になってましたって」

「はあっ？」

「二人きりで話したいことがあるので、放課後に第二校舎の裏に来てくださいいっ

て。ピンクの封筒に入れて」

「はあああつ？」

俺の頭はこんがらがった。

てことは、何？ 有馬は俺が有馬のことをそういう目で見てるって、誤解してるのかっ？

それ、やばい。やばいつて！

「だって他にあいつを呼び出す方法なんてあるかっ？ 有馬の興味を引かないと無視されて終わるだろ」

「ない、ないけどさ……でもそれって……」

俺は第二校舎の裏で俺を見つけたときの有馬の反応を思い出した。

どんな可愛い女子が待っているのかと思っていたら、まさかの俺！ 相当がっかりしただろう。

「きつかけはなんでもさ、話聞いてもらえて勉強教えてもらえることになったんだからいいだろ？」

「よくない！ そういうの、ホントよくない！」

だから、だ。だから、有馬は微妙な顔をしていたんだ。俺に愛の告白をされると思って驚いていたんだ。

頭の中で有馬との会話を思い出す。

——あの手紙に書いてあったことって、本気？ それとも俺をからかった？

やばい。俺はあのとき、からかってない、本気だって言っちゃっている！ ガチで有馬のことを好きだって勘違いされたかも。

——で、何？ 俺とどうりたいの？

どうなりたいって、あれ、恋人的な関係のことかどうかを確認してたんじゃない……!?

なりたくないから！

俺はそんな関係になりたくて有馬を呼び出したんじゃないから！

——友達じゃダメなんだ。

いいよ、有馬！

俺はお前と友達止まりでいい。なんなら友達になってくれなくてもいいレベルだよ。俺は勉強を教えてもらいたいだけ。恋愛感情一切ないからな！

「莉紬、おい莉紬、大丈夫か」

立ち止まった俺の肩を、がくんがくんと裕太が揺さぶる。

「大丈夫なわけないだろ、有馬が変な誤解してたらどうすんだよっ」

恥っつず！俺が好きな有馬つてことになってんの、マジで困る。

今度からどんな顔して会えばいいんだよ！

「大丈夫だよ。お前、男なんだからさ。有馬もそこまでマジに受け取らないつて。だから勉強教えてやるつて言ってくれたんだよ。な？」

「うーっ……」

そうかなあ。本当にそうかなあ……

「そう重く考えるなよ。莉紬が何もしなきゃ、あっちからは何もしてこないんだから。有馬にはただ勉強教わるだけ！」

「まあ……俺はなんもしないけど」

「だろ？」

裕太に励まされても俺は微妙な気持ちのままだ。

でも、まあ、今後、そのことには触れず、愛の告白の件はうやむやにしてしま

えばいい。

俺にその気はないし、有馬だつてそうだ。そんな俺たちの間に何か起きるはずがない。

裕太とそんな話をしていたときに、俺のスマホが振動した。確認すると、バナ－通知は『有馬真』の文字。

「有馬からだ！」

スマホを勝手に覗き込んだ裕太がデカい声を出す。

俺は裕太と頷き合い、ゆっくりとメッセージを確認する。

「おうわわわっ！」

その内容のエグさに、俺は思わずスマホから目を背けた。

そこには、期末の試験科目全部についての細かな攻略法と勉強すべき範囲が画面に収まりきらないほど長文で書かれている。

「何これ、怖っわー！」

怯える俺を尻目に、裕太が「有馬すつげえ！」と感激している。

たしかにすごい。これだけの情報を持っていることもすごいし、それを惜しげ

もなく俺に教えてくれるところもすごい。

「莉紬、よかったな！ 有馬はお前に本気だぜ？」

「言い方！ 頼むから言い方、気をつけて！」

いろいろあつたけど、こんな感じで俺は有馬に勉強を教えてもらえることになった。

大丈夫だ。俺は有馬に興味はないし、有馬も俺に興味はない。

俺はただあいつの力を借りて、無事に高校を卒業したいだけ。

手紙のことなんてさっさと忘れてしまおう。

2 特別な時間

地獄だ。地獄の日々が始まった。

放課後、人がまばらになった教室で俺の前に立ちはだかるのは有馬だ。

「な、何……？」

「何じゃないだろ。一週間前に俺が言った宿題、全部終わってる？」

「あ、あれさ……」

俺はすでにタジタジだ。

あれから俺たちは毎週金曜日の放課後に予定を合わせて勉強することになった。そこに向けて前々から有馬に宿題を出されたんだけど、はつきり言って全部終わらせるのは無理だった。

俺なりに毎日必死でやっているつもりだ。それでも有馬に言われたこと全部はこなせない。

「ごめん、終わってない」

両手を合わせて謝ると、有馬が「またか」と溜め息をつく。

「あのさ、時間がないんだから、サボらずにやってきてくれると助かるんだけど。やる気ある？」

「やる気はあるんだよ。ただ時間がなくて……」

「時間？ 部活が忙しいのか？」

「ううん。俺、帰宅部。部活やってない」

「は？」

うわ。有馬の視線が痛い。

そうだよな。有馬は週四のテニス部でめっちゃ活躍しているのに、成績もいいんだからな。

「なんで、それでできないんだよ……」

「はいっ！ 出来損ないですいません！ ほんとごめん。今からやるから」

その気持ち、わかる。勉強を教えてくれつつ頼んだのは他でもない俺だ。

頼んだくせに、言われたことを真面目にやっていなかったらそりゃブチ切れる

よな。

有馬との勉強会が始まってから今日で三回目。その三回とも、俺は有馬に言われた宿題をこなせずにいる。

こんなことばかり繰り返していたら、そろそろ有馬に見限られるんじゃないだろうか。

「……わかった」

有馬は俺の前の机の空いている椅子に後ろ向きに座った。

「終わるまで待つから」

有馬はスクールバッグから文庫本を取り出して静かにそれを読み始めた。

つまり、まだ俺に付き合ってくれる気らしい。

よかった。仏の顔も三度まで。今日まではなんとか許してくれたみたいだ。

「う、うん。すぐにやる」

俺は慌てて問題集とノートを取り出して机に広げた。

ちなみにこのノートは有馬と勉強するために新しく用意した。気合を入れるために、真つさらなものを使うことにしたんだ。俺の中で密かに『有馬ノート』つ

て呼んでいる。

待たせて申し訳ないなと思いつつ、有馬に指定された数学の問題を解いていくが、解けない！

答えを見ても、なんでこんな式になったのか全然理解できない。

「有馬あ！ まだ帰らない？ 今からみんなでカラオケ行こうって言うてるんだけど」

有馬の友達が、俺たちの様子を見にきた。

「うん。俺は行かない。また今度」

「わかった。委員長は大変だな！」

頑張れと手を振って帰る彼らに、有馬が手を振り返して応える。

やっぱりこいつは委員長としての責務から俺に付き合ってくれてるんだろうな。なんか、すげえ申し訳ない。

「……ごめん、有馬」

俺は手にしていたシャープをノートの上に置いた。

「いいよ、カラオケ行つて。有馬に言われたことやってこなかった俺が悪いんだし」

見上げると、有馬がハツとした顔をする。

「ま、また来週教えてくれよ。来週こそお前に言われた宿題をなんとかやつてるからさ」

俺はわざと明るい声を出す。

有馬に気を遣ってほしくなかった。俺のせいで友達と遊べなくなるのは申し訳ない。

「……いい。行かない。七沢との約束のが先だった。友達と交わした約束は守るって決めてるから」

「え……？」

誰が、誰の友達だって……？

有馬は俺を優先してくれるのか……？

「七沢、その問題わからないの？ さっきからずっと手が止まってる」

「あ、ああ……これさ、答え見てもわからない。これがどうしてこの式になるの？」
「それはさ」

有馬は座っていた椅子を持ち上げて、俺の隣に移動した。そして俺のシャープ

ンでノートに数式をスラスラと書き連ねていく。

「ここが、こうなってる」

一つ一つ丁寧に数字の動きが描かれる。

「ここは一つにまとめて、それから式を整える」

「ホントだ。この式に辿り着いた……」

有馬の手にかかると、複雑な数式が魔法みたいに綺麗に整っていく。

目の前で解法を見せつけられてわかる。そんなに難しいことはしていない。

てか、すごいわかりやすい。

「わかった？」

「うん」

「このパターン、よく出るから。ほら、この問題も同じ。やってみて」

そう言われて、俺は次の問題を解いてみた。

一人で勉強しているときと違う。有馬に見られていると緊張する。

「あ、そこ、こっちの考え方のほうがいいよ。先にここを揃えておくとあとが楽だから」

「え？ あ、うん。ありがとう……」

なんか、すごい優しいし。

「解けた。正解、すごい。よくできました」

「う、うん」

正解したらいちいち褒めてくれるし。

「これと同じような問題が期末で絶対に出る。覚えておいて」

「わかった。印つけとく」

「うん。そうして」

テスト勉強のコツまで全部、知ってるし。

こうして勉強会をするようになってから、みんなが有馬に勉強を聞きにいく理由が俺にもわかった。

有馬は親身になって手取り足取り教えてくれる。教え方もうまい。できないところを理解して、そのレベルに合わせて話してくれる。

できなくても怒鳴り散らさないし、できたら褒めてくれる。

これは、みんな有馬にハマるだろうな。

有馬は普段、あまり表情を変えない。誰かに馴れ馴れしくしたり騒いだり慌てたりしない。いつも冷静だからもつとクールな奴かと思っていた。

でも、話してみると違う。

人のことをよく見ていて、気遣いがすごいし、とにかく優しい。

真面目すぎるメガネ委員長のこいつがどうしてモテるのか、ちよつとわかった気がする。

勉強嫌いの俺が有馬のおかげで夢中で勉強していると、スマホのアラームが鳴った。

十七時十五分を告げるアラームだ。俺はこれ以上学校には残れない。

「有馬、時間だ！俺、行くところあるからもう帰らなきゃ」

机に広げていたものを迷いなく片づけて、立ち上がる。

「ありがとう有馬、また来週な！」

さつさと教室を出ようとしたとき、有馬が追いかけてきた。

何も言わずに俺の横を歩く。

「え……何？」

「別に。俺も今から帰るから」

たしかに。俺が帰るなら有馬も帰るに決まっている。俺たちが向かうのは同じ校舎の出入り口だ。

校舎の外でも俺と有馬の行く先は同じ。当たり前だけど、校門に向かう。それから大抵の生徒は駅へ続く一本道を進む。

歩きながら、俺はすぐ近くにいる有馬の存在が気になって仕方ない。

どうしよう。有馬と二人で下校しているみたいだ。

気まずい。落ち着かない。

ちよつと話しかけてみようかな。

話題、話題……こういうときの何気ない話題ってなんだろう。

「あのさ、有馬」

有馬に近づくと、嫌がりもせずに「何？」と隣にいろのを許してくれた。

「有馬の好きな食べ物って何？」

俺のコミュ力では、こんなありきたりな話題が限界だ。気の利いた会話なんて思い浮かばないよ。

「特にない」

「特にないっ？」

意外な答えに変な声が出る。

「なんでも食べるよ。好き嫌いは特にないんだ」

「へ、へええ……」

やつぱりそういうところも優等生なのかな。でもこれじゃ会話が秒で終わる。

「じゃあさ、好きなゲームとかは？　どんな系統が好き？」

「んー。ゲームはあまりやらない」

「あつ、そうっすか……」

やばい。俺との共通点が見つからないぞ。

「そうだ。ハマってる趣味とか、休みの日にしてる好きなこととか。あ！　有馬はテニス部だったよな？　テニスはどこが好きなの？」

「特別なものは何もない。学校と部活と塾で暇ないし。テニス部も誘われたから入っただけ」

「ですよねえ」

ダメだ。話が全然盛り上がらない。

俺とコミュニケーションとるのが面倒くさいのかな。でもさ、好きなもの一つくらい教えてくれてもよくないか？

「有馬は何が好きなんだよ……」

有馬は俺のこと、基本的に嫌いなのもかもしれない。それとも警戒されているのかな。

わかんねえ。有馬のこと全然わっかんねえ。

「七沢、俺に興味持ってくれてるの？」

「へっ？」

「俺のこと、そんなに知りたい？」

有馬は俺に妙な視線を向けてくる。それは友達のそれじゃなくて、俺の気持ちを推し量るような特別な視線だ。

これやばいぞ。

有馬は、俺が好意を持っているから質問攻めにしてるって勘違いしてるんじゃないか。

違う、違うって。

俺は二人で無言で歩いているのが気まずくて無理に話題をふっただけ。有馬にそんな気持ちはまったく抱いてない。

「七沢って本当に俺のこと好——」

「待った！」

あつぶね！

有馬が恐ろしいことを言い出したから、俺はすかさず話を遮った。

有馬、頼む。あの子の手紙の件は綺麗さっぱり忘れてくれ。もう蒸し返さないでくれ！

「いや別にそんなつもりはなくてっ。いいんだ、話したくないなら俺と話をしてくれなくても」

「話したくないわけじゃない」

「えっ？ あ、そうなのっ？」

さつきまでのあの冷たい態度で、俺と話す気あつたんだ。まずそこにびっくりだよ。

「七沢は？ 好きな食べ物ある？」

そう思っていると、今度は有馬から話をふってくれた。

よかった。このまま流れを変えよう。甘い空気になんてさせてたまるか。

「あるある！ 俺、食べるの好きでさ。なんでも好きだけど、特に好きなのはお好み焼き！ もちチーズがうちの定番なんだけどホントうまいから」

「そうなんだ。お好み焼きって食べたことがないな」

「マジで？ お好み焼き食ったことない奴なんているんだ！ 俺のお好み焼きう

まいよ、今度作ってやるから食べにこいよ」

軽いノリで言ってしまったって、即座に後悔する。

有馬が俺んちに遊びにくるわけがない。そんな日が訪れることなんてないのに。

「ごめんごめん、なんでもない！ 有馬は電車？ どこに住んでるの？」

俺は慌てて話題をすり替える。

「うん。電車。七沢も？」

「そうだよ、最寄り駅は西駅だけど、用事があつて一つ手前で降りるんだ」

俺は有馬と一緒に改札を抜けていく。奇しくも俺と有馬の降りる駅が同じだっ

たので、ホームも一緒だ。

「用事って何？ 七沢も塾とか通ってるの？」

「俺が？ 塾なんて行くわけないよ。どうしても外せない用事。ある人が俺を待つてるから」

そう。これは俺が何よりも大切にしていることだ。

俺の姿を見るなり駆け寄ってくるあの顔を思い出しただけで頬が緩んでしまう。

「へえ」

有馬の声のトーンが低くなる。

なんか、怒ってる？ え？ 俺、なんかやばいこと言った？

「その人のこと考えるだけで七沢はそんな顔するんだ」
「はっ？」

有馬にジト目で見下される意味がわからない。

なんだこれ。有馬、どうした……？

「七沢って俺のこと……」

「いやー、暑い！ 今日暑いなっ！」

たいして暑くもないのに、俺はポケットからミニタオルを取り出し額を拭う。
変な汗が噴き出してきたからだ。

その話題、やめてくれ。

なんて返したらいいかわかんないよ。だって勉強を教えてもらっているのに有

馬のこと「嫌い」とは言えない。

でも「好き」はもつと言えない。

ニュートラル！ どうかニュートラルでお願いします！

「そ、そうそう。そんなわけで俺もまあまあ忙しくてさ。だから俺、部活に入らなかつた。本当はちよつとやってみたかつたけど」

話を逸らして会話を続ける。

そう。俺にはやるべきことがある。高校に入ったとき部活に憧れた時期もあつたけど、そんな夢はすぐに捨てた。

「意外。部活が面倒だからやらないのかと思ってた」

「あはは。だよ。俺、そんなキャラだよ。授業もサボってばっかだし」

「お前さ、あれはひどいぞ。授業サボりすぎ。もっと真面目にやれよ、授業点も

大事なんだ。昨日も昼休みのもと、サボって家に帰っただろ」

「あれ？ バレてた？ 裕太に保健室行ってるって言ってるって頼んだのにな」
笑って誤魔化そうとしたが、有馬が厳しい目を向けてくる。

「期末の点数だけじゃない。授業には真面目に出席する。レポートとか普段の提出物もしっかり出すんだ。特に地理はレポートの配点が高い。来週が締め切りだから必ずやれよ」

「はいはい。わかってるって」

有馬は俺の母さんよりも母親みたいだ。頼んだのは勉強を覚えてくれってことだけに、気がついていたら成績を上げるためのアドバイスをたくさんしてくれる。世話を焼かれるって悪くないな。

俺のこと気にかけてくれてるってだけで、なんかすごく嬉しい。

やがて俺たちの目の前に電車が到着した。

この時間、いつも車内は激混みだ。俺と有馬はお互いの身を寄せるようにして電車に乗り込んだ。

「わっ」

発車したときの揺れでバランスを崩してふらつく。その拍子に有馬の靴を踏んでしまった。

「ごめん有馬」

混んでいて掴まる手すりがなかったんだ。

有馬は背が高いから離れた場所にあるつり革のさらに上のバーを掴めるけど、俺のいる場所からは、どこにも手が届かない。

「有馬、悪い、肩貸して」

また足を踏んだらいけないので、有馬の肩に掴まらせてもらう。それからふたつかないようには有馬の身体にそっと寄りかかった。

足の置き場がないくらいの満員電車だし、最初から有馬に寄りかかっちゃったほうが倒れないだろう。これが一番合理的だと思っただよな。変に遠慮してちよつとだけ掴まったって意味ねえし。

有馬は何も言わなかった。満員電車の中で、寄りかかる俺と自分の身体を腕一本で支えている。

制服のブレザーの上からでもわかる。こいつって逞しいたくまよな。裕太と違って安